

MICHAEL

written by HADEYA

1

翼をもがれた私。FALLEN——どこまでも堕ちて行く。

辿り着くのは、闇。終わりなき漆黒の世界。

耳にするのはポツンポツンと滴る水滴の音。赤いレーザーは〈私〉をバラバラにスライスして——

どん底。その味を君は知っているか？

身動きが取れず、何も出来ない無力感。出来る事は.....ない。

今、私は新しい波を待っている。ただただ、荒波を待っている——何事もなく、丸く収まりますように、と祈りながら。

耳を塞ぎ、怯え、蹲りながら。

2

事件はナイトクラブで起きた。渋谷のナイトクラブのトイレで。

私はそこで何が起きているか知っている。知っていながら何も出来ずにいる。

彼女は確か〈ミサ〉と言う名前だった。そう記憶している。

ミサは今、犯されている。トイレで。複数の男性に。

ドラッグを求め、彼女はやって来た。そして、ドラッグをキメた。思い通り。

しかし彼女は知らない。この後の展開を。

彼女はマンションへ連行され、あらん限りの凌辱を受ける。男共はそれを〈儀式〉と呼んでいる。

私はその儀式がどれだけ鬼畜なモノか知っている。そして彼女は地獄へ堕ちる。

私には彼女を救う事が出来る。私のハンドバッグには闇ルートで入手した〈デリンジャー〉が収まっているからだ。これで連中の.....男共のド頭に銃口を向け、こう言えば良い——気安く触るんじゃねえ、薄汚ねえゲス共！

しかし私は黙っている。何事もなく済みますように、と願っている。

そんな自分を私は恥じている。心の底から情けないと思う。

3

ミサの喘ぎ声が出て、背後を見た。このドアの向こうで儀式は行われている。
その時、あり得ない体験をした。ボヤァと光る白い光.....精霊のような光が私に憑依したのだ。
光は私に憑依し、語り掛けた——何故、貴女は何もしないのか、と。貴女はそんな自分が恥ずかしくないのか、と。

4

私は.....生きる意味を考えた。何らかの理由があり、私はこの世界に〈生〉を授かった。そしてロクでもない男と結婚し、ガキを産み、やりたくもない仕事に励む。そんな私は奴隷だ。それ以下のクズだ。
何れ私は死ぬ。病室で家族に看取られながら。一体、私は何の為に、この世界に生を授かったのか。

.....本音を言えば、燃えていたい。いつまでも〈イナズマ〉でいたい。キラメキ、輝き、青春を謳歌したい。

現実の私は何も出来ずにいる。つくづく情けないと思う。

ダンスフロアを見た。そこにはレイブする輩がいる。レイブしている振りをする輩がいる。精一杯、レイブする振りをして、自分がイケていると勘違いする。レイブに嵩じる彼らと私は何が違うのか。同類——それが答え、だ。

5

そうあってはならない、と思う自分がある。それで良いのだと説得する自分がある。そして私は真理に至る。自分がクズであると言う〈真理〉に。

悔しいし、悲しい。同時に虚しい。本当は暴れたくて、ウズウズしている自分がある。連中をブチ殺したい、と思う自分がある。ミサも何れ感じるだろう。今、私が立っているドアの前で。そして痛感するのだ——あの時、アクションを起こすべきだった、と。毎夜、枕元で私が思うように。

6

「今からでも遅くはありません」

耳奥で声がある。聴き慣れない声がある。透き通ったクリア・ボイスが。

声は言う。

「貴女はいつだって行動を起こせる。貴女はいつだって人生を変えられる。違いますか？」

「私は……」

「貴女は願っている。人生を変える事を。私は思う。何故、行動しないのか、と。貴女を見ていると、水を前に臆するチビッ子を思わせる」

「……」

「飛び込めば良いんですよ。未来に。未知の未来に。そこに真の輝きがある。その輝きを見て、人生の意味を貴女は知る。ただ飛び込めば良いんですよ。簡単な話だ」

「貴方は——」

「ミカエル。人は私をそう呼びます。さあピストルを手に取りなさい。そして勇気を絞り、背後のドアを開けるのです」

「わ、私は——」

「さあドアを開けるのです。人生のドアを」

私は……ドアを開けた。何も考えず。室内の個室から喘ぎ声とする。心臓が跳ねる。その時、音楽が聴こえた。聞いた事のない音楽……精霊の音楽。ミカエルは言った。

「挑む事。それが人生の意味です。さあ、ドアを開けるのです！今すぐ！」

全身に未知のエネルギーが宿った。精霊の力。そして私は——

7

蹴った。ドアをブチ破り、叫んだ——私の人生を返せ！と。

男——隆弘の頭部が吹っ飛ぶ。キネシスで。ハンドバッグからデリンジャーを抜き、撃鉄を起こし、もう一人の野郎のド頭に突き付けた。

「お、落ち着けよ、奈美！」

「奈美じゃない。私の怒りは」

デリンジャーを放った。右拳で野郎の横っ面をブン殴った。殴って殴って、ブチ殺してやった。それで私はエクスタシーを得た。底知れぬエクスタシーを。次の瞬間、私はドラッグで酩酊する彼女を見た。それは私だった。かつての〈私〉だった。

私は彼女に手を差し伸べた。救いの手を。酩酊した女性が呂律の怪しい口調で言う。

「……貴女は？」

「ミカエル——」

女性の手をそっと握る。救いの手を。彼女を立たせ、抱き締める。

「——か弱き乙女を救う大天使」

私はキスをした。女性の口にペロを突っ込み、激しく求める。そこへ従業員が駆け付けた。

「何をされているんです！」

「……見りゃ分るだろうが。邪魔すると手前も殺っちまうぞ」

私の表情は真剣だ。100パーセント、真剣だ。御託を抜かしやがったら、貴様も殺っちまうぞ。読者さん、よ。

8

背後から鈍器でブン殴った。

かっばらったご機嫌な車でブツ飛ばす。一般道を。法定速度の60キロ・オーバーで。

助手席のミサは赤ワインをラッパ呑みしている。ゲラゲラ笑いながら。

カーラジオのボリュームを上げる。イナズマ・ピアノが炸裂する。

アクセルを踏んだ。目一杯。赤信号を突っ切る。タイヤが火花を散らし、アスファルトを焦がす。行くぜ……本題はここからだ。ここから私とミサはある行動に出る。

誰もがド肝を抜かれる行動——深夜のハード・アクションを。

9

背後でサイレンの音がする。車内ミラーに赤いパトランプが光る——警察。

ブレーキを踏みながら、左手でギアをローに落とす。速度が一気に落ち、両脇をパトカーが素通りする。

同時にアクセルを踏み込み、ハンドルを旋回させながらギアをトップまで持ち込む。

一般道を逆走する私の目は捉えている。次に自分が何をすべきか、を。次にすべきは——

10

叩いた。コンビニを。抵抗する店員の脳天をワインボトルでカチ割り、ギザギザのエッジで顔面をメッタ刺しにしてやった。

そこへパトカーが駆け付ける。

銃撃戦——連中の武器はニューナンプ。私の武器は指先で創った空気鉄砲。そしてアレキサンダーの如き勇ましき。

マシンガンを乱射した。警官殺し——連中を皆殺しにしてやった。ざまあ見やがれ。

1 1

ミサと粉をキメた。シャブもキメた。ありったけのヤクを身体にブチ込んだ。

激しくレズって、極上の愛を紡いだ。

ミサが言った——空を飛びたい、と。ここは雑居ビルの屋上。OK——私は答えた。そのまま、お互いの手を取り、助走を付け.....

一緒にブツ飛ぼうぜ！

1 2

「いやっほおおっ！」

飛び降りた。雑居ビルの屋上から。小便がしたくなったので、パンツの中に撒き散らした。ついでに絶頂の潮も噴いてやった。

私は抱き寄せた。ミサの上半身を。ミサも私を抱いた。相手の唇を貪り、落下しながらリビドーを爆発させた。

私たちはハイになり、同時に世界が180°まで回転した。もはや私たちは落下していなかった。飛んでいた。本当に空を飛んでいた。

「愛してる、ミカエル」

ミサが言った。甲高い声音で。

私は答えた。

「世界は私たちのモノ」

視界が回転した。180°、360°、高速で回転した。グルグル、グルグル高速で回転して行く。

そして見た、光を。眩い光を。私は知った——生きる意味を。極上の愛のテイストを。

私の名は、ミカエル。信じる者に救いの手を差し伸べる大天使。

*

未だ見た事のない〈光〉がある。あなたは今、光を見た。

柔和で、美しく、神々しい光。

そして、あなたは知った。生きる目的.....つまり自己実現を。

魂を解き放て。我々はレイバー。そしてサバイバー。

共に生きよう。この邪悪な世界を。穢れなき光として。

私は光だ。あなたも光だ。我々はフォトンで出来ている。
限られた人生を力の限り生きよう。時として厳粛に、時として羽目を外し。

その時、世界は祝福に包まれる。世界は輝き、我々は恩恵を授かる。その恩恵に対し、感謝して生きる。

自分がこの世界に生を授かった事に。自分がこの世界の一部である事に。
自分を信じる〈あなた〉は輝いている。誰よりも力強く輝いている。その輝きに至福を見るだろう。

光——信じる者だけが見る、白く眩い光。柔和でいて、デリケートな光。

あなたは光に包まれる。事実、包まれた——それは否定しようない観測的証拠。
世界は美しい。余りにも、余りにも美しい。その美しさを否定するな。ダークサイドに陥るな。

あなたは私の主張の意味が分かっている筈だ。あなたは私の言葉を信じるか？ あなたは私の言葉を否定できるか？ (了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872